「大野市文化財保存活用地域計画」（文化庁認定）掲載事業

市民所有の文化財展

蓮光寺の寺宝

普段、非公開となっている市民が所有の文化財を特別に公開します。

今回は、蓮光寺（大野市日吉町）が所有する寺宝を展示します。



慈視院（朝倉）光玖禅師、その後倍國師を尊重せられて、越前大野郡に於て、青蓮寺 蓮光寺の二精舎を創建して（真盛）上人に付與し、不断念佛の道場とぞなし玉ひける（「西教寺中興圓戒國師和解傳」）



真盛上人筆 十念名号
（蓮光寺 蔵）

【会　期】令和5年10月28日（土曜日）～ 12月3日（日曜日）（期間中無休）

【時　間】午前9時から午後4時まで （日曜・祝日は午後5時まで）

【入館料】一般300円、中学生以下 無料

【会　場】大野市歴史博物館　住所：大野市天神町2－4　電話：0779－65－5520

【大野市教育理念】明倫の心を重んじ 育てよう 大野人

結の故郷 越前おおの

大野市は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

展示資料

真盛上人 六字名号　（時代　室町時代） 六字名号とは「南無阿弥陀仏」のことで、「阿弥陀仏に帰依します」という意味です。 「阿弥陀」とはサンスクリット語（古代インド語）の「アミターバ」「アミターユス」を漢字で表した言葉で、それぞれ「量りしれない光を持つ者」「量りしれない寿命を持つ者」を意味します。阿弥陀仏が「無量光仏」「無量寿仏」とも呼ばれるのは、このためです。 鉤形になっている「南」の一画目、「方」になっている「弥」の偏、「色」になっている「陀」の旁が、真盛の名号の特徴です。 真盛の名前は記されていませんが、左下に記された花押から、真盛が書いたものと分かります。
真盛上人 六字名号　（時代　室町時代） 六字名号とは「南無阿弥陀仏」のことで、「阿弥陀仏に帰依します」という意味です。 「阿弥陀」とはサンスクリット語（古代インド語）の「アミターバ」「アミターユス」を漢字で表した言葉で、それぞれ「量りしれない光を持つ者」「量りしれない寿命を持つ者」を意味します。阿弥陀仏が「無量光仏」「無量寿仏」とも呼ばれるのは、このためです。 鉤形になっている「南」の一画目、「方」になっている「弥」の偏、「色」になっている「陀」の旁が、真盛の名号の特徴です。
真盛上人 十念名号軸　（時代　室町時代） 延徳２年（1490）８月、真盛が蓮光寺で別時念仏（期間を定めて念仏修行を行うこと）を行ったとき、平泉寺の使いが進み出て、「平泉寺の高僧が説法を聞くことを切に願っているが、高齢のため蓮光寺に来ることができない」と伝えました。そこで真盛は、「南無阿弥陀仏」の名号を１０遍書いたものを渡しました。 これは、浄土宗を中心に行われている、僧と信者が互いに名号を１０回唱えて極楽往生の縁を結ぶ「十念名号」に由来するものです。以後、十念名号軸は、天台真盛宗の布教に使われることとなりました。 本資料は、真盛が明応２年（1493）に自筆した十念名号軸です。通常は左下に「授〇〇〇訖」として授与先の名を記しますが、相手が高位の人物であった場合は、本資料のように相手の名を記しません。
宗門檀那請合拾五ヶ條御掟（写）　（時代　江戸時代） 信仰が禁止されていたキリスト教と日蓮宗不受不施派、同宗悲田派（以下、キリスト教等）を弾圧するために、慶長１８年（1613）に幕府が出した通達の写しです。全

国の寺院に伝達され、門前などに掲示されました。その控えとして保管されていたのが、この「写し」です。

内容は、キリスト教等を信仰する者は仏教や寺院を大切にせず、法要を行わないので、そういった者は厳しく取り調べるというものです。これまで寺院との関りが少なかった仏教信者も、キリスト教等の信者と誤解されないよう、法要や寺への布施を行うようになり、現在のように寺院と檀家の関係（寺檀制度）につながっています。

ただし、悲田派が禁止されたのは元禄４年（1691）のため、この通達は仏教側が作成した偽法令だと考えられますが、幕府の正式文書の位置づけを持ち続けました。

法華経（坊城俊逸写経）　（時代　江戸時代）

巻末に、坊城俊逸が書写して西教寺（天台真盛宗本山）に納めたものを、寛政３年（1791）に西教寺実成坊の慈淵が蓮光寺に寄進したと書かれています。

坊城俊逸は江戸時代の公家で、享保１２年（1728）に生まれ、宝暦５年（1755）に権中納言となりました。宝暦８年（1758)、「宝暦事件」（幕府を非難し、天皇や朝廷の権力の復活を目指す者が大量に処罰された事件）で永蟄居（謹慎）となり、２年後（1760）に出家、安永２年（1773）に亡くなりました。

宝暦事件で処罰された竹内式部（坊城俊逸の師）の菩提を弔うためになされたと考えられることから、竹内式部が亡くなった明和４年（1768）から坊城俊逸が亡くなるまでの５年間のうちに書写・奉納されたようです。

真盛上人 奏進御法語（写）

真盛が飛鳥井氏に示した法語（仏の教えを説いた語句・文章）で、「念仏」と「往生」の関係について解説がされています。

真盛は望まれるままに六字名号を配りましたが、その際に、一日に３００遍（小名号であれば１００遍）の念仏を誓約させるなど、念仏を大切にしました。真盛の生涯をまとめた『往生伝記』には「もっぱら念仏すれば往生に何の疑いがあろうか」と、念仏の功徳を説いています。

本資料には、「念仏を唱えて、その念仏の力によって浄土に往生する」と理解する飛鳥井氏に対して、それでは「念仏」と「往生」を分けて捉えていると指摘し、「称名と往生は一体のものであり、南無阿弥陀仏と唱えることは、仏の悟りがそのまま私たちの往生であることを心得るべき」と説いています。

真盛上人尊像　（時代　宝暦８年（1758)）

真盛（嘉吉３年（1443）～明応４年（1495））は、現在の三重県で生まれました。１９歳から２０年間、比叡山で天台教学を学びましたが、文明１４年（1482)、母の死をきっかけに比叡山内の黒谷青龍寺に移ると、『往生要集』（天台僧の源信が浄土教の観点で極楽往生に関する文章を集めた仏教書）を読み、「六字名号」（南無阿弥陀仏）を唱えること（称名念仏）の大切さに気付きました。

真盛は、戒律（守るべきルール・自力・止悪・天台宗の教え）と称名念仏（阿弥陀仏の名を唱える・他力・行善・浄土宗の教え）の両方が大切（「戒称二門」「円戒念仏」）と説き、生涯をまとめた『往生伝記』には、天台宗の戒律を授け、往生要集を教えて念仏を広めた（円頓の化儀を調え妙戒を授与し、往生要集を講じて念仏を弘通）と記されています。また、真盛の行状を記した『雲居月双紙』では、称名はあらゆる罪障を消滅させる最高の功徳である（南無阿弥陀仏ととなふれは、八百万劫の罪障を消滅する無三功徳の名号也）と、名号を紹介しています。こうした名号に対する価値づけは、『往生要集』の「臨終行儀勧念」や『観心略要集』（伝 源信）にもみることができ、法然の浄土思想や『観無量寿経』の「是心作仏是心是仏」（（名号を唱える）心が仏となる、この心こそ仏である）まで遡る考えです。

「無欲清浄 専勤念仏」（欲張らず正しい生活を送り（戒）、一心に念仏を唱える（称））を説いて民衆に受け入れられた真盛の教えは、訪問先では市場のような人だかりができ、朝廷からも説法を望まれました。文明１８年（1486）、比叡山の麓、坂本の西教寺に移り住むと、ここを不断念仏（絶えず名号を唱えること）の根本道場とし、一派（のちの天台真盛宗）を創始しました。

現在、天台真盛宗（盛門派）は天台宗山門派（延暦寺）・天台宗寺門派（三井寺）とともに天台三派のひとつに位置付けられています。

涅槃図　（時代　文化１１年（1814））

「涅槃」とは肉体の死を経て、煩悩（悩みや欲望など）をなくした完全な悟りの世界に生まれ変わることであり、仏教の究極的な実践目的とされます。

釈迦の涅槃の様子は『大般涅槃経』で伝えられ、「涅槃図」に描かれます。釈迦は２月１５日に入滅したといわれており、天台真盛宗をはじめ多くの仏教宗派では、同日に釈迦の法要である「涅槃会」を行っています。

本資料の裏には、文化１１年、持宝院（現在の錦町（毘沙門通り）にあった修験寺院）の歴代住職の菩提を弔うために、智栄（父）、リヨ（母）、諦厳院（兄）、宗昌寺寿門和尚（弟）の４名が施主となって本資料を寄進したことが記されています。また、箱書には、当時の住職・良禅西堂（蓮光寺２７世）の名で、堯尊西堂（蓮光寺２６世・諦了西堂か）を本資料の本願主とすると書かれています。

維摩居士図　（時代　江戸時代）

維摩は古代インドの商人で、釈迦の在家の弟子でした。大乗仏教の奥義に達し、釈迦の布教を助けたと言われています。『維摩経』によれば、維摩が病気になった時、釈迦は弟子を見舞いに行かせようとしましたが、かつて論戦で負けたため誰も行こうとはしませんでした。そこで文殊菩薩が代表して病室を訪れ、「仏道」について問答を交わしました。

本資料の作者・狩野永真安信（1614～1685）は１０歳で狩野貞信の養子となり、惣領家（狩野本家）を継ぎました。安信の画風は丁寧で真面目な描線で、一見すると

単調な筆墨と評されますが、これが明快さ、力強さに転化する場合もあり、これらが利点として出やすい人物画に優れた作品が多いのが特徴です。

二河白道図　（時代　江戸時代）

画面の右側（北）の尽きることなく流れる河は「貪りや執着」、画面の左側（南）の炎が満ちた河は「怒りや憎しみ」を表しています。人はその間、わずか１５cm ほどの道を歩いて西の岸に向かいますが、火と波が襲い掛かり、また、東岸には猛獣や盗賊が待ち構えています。進む・止まる・引き返す、いずれも「死」を覚悟させますが、東岸の釈迦如来が「行け」と励まし、西岸の阿弥陀仏が「来い」と招いています。阿弥陀仏の後方には穏やかな蓮池と極楽浄土が見えています。

作者の土佐光孚（安永９年（1780）～嘉永５年（1852））は江戸時代後期の土佐派の絵師です。１０歳の時に父と共に内裏（天皇の居所）や仙洞御所（上皇の居所）に作品を描くなど、早くから絵師としての才覚を現わしていました。

普賢菩薩図　（時代　江戸時代）

仏による衆生救済を助けるといわれる菩薩です。一般的には宝冠や胸飾りなどを身に着けますが、本資料では簡素な衣服と乱れた髪（弊衣蓬髪）で描かれています。洒脱（さっぱりしていて俗気がない）な姿と涼やかな目元の描写に気品を漂わせる逸品です。手に持つ経巻は「法華三部経」のひとつ、『仏説観普賢菩薩行法経』と思われます。この経典は日本では『懺悔経』とも呼ばれ、「瞑想」と「悔い改め」の実践を説いています。

作者の廣渡心海は武雄鍋島家（佐賀藩家老）に仕えた絵師で、江戸時代前期に活躍しました（生没年は未確定）。狩野益信（江戸幕府御用絵師（表絵師筆頭））に絵を学び、寛文４年（1664）、絵師として当時最高の称号であった「法橋」の勅許を得ました。